

内景備覽

上

武
子
2
1



門中武
第 52
卷 1

天保庚子新刻 竿齋石坂宗哲撰

內景備覽

全二冊

心之一字發百代之蒙
榮衛三焦興千載之廢

陽州園
臧版



內景備覽序

昔秦越人受長桑之秘。三十日知物。而有
八十一難著。歷代傳之一人。至魏華佗乃
燼其書於獄中。蓋亡矣。今傳者。吳大鑿令
呂廣所重編。與佗之所燼者。名存而實亡
矣。元張翥每以文章自負。其序滑壽之所
著難經本義曰。發難折疑。鬼神無遁情也。
言過尊信。於越人乎。可謂不幸也。元明清
之鑿惑翦之言。奉為典型。以為萬世之法



內景備覽

序

者。豈不謬也耶。茲年庚子之夏，卧病。病間
取嘗所著內景備覽，令子弟校之。以上梓。
如此書世之業醫者，能各置一弓於側，以
補素靈之闕，乃不借深求力討，而宗脉榮
衛十二藏，膻中命門三焦丹田，其他諸器
夫人具於己者，如見垣一方人，使越人復
生。未肯多讓。奉軒岐之道者，不棄予鄙俚
之辭，有所發明者，靈蘭金匱之秘，亦不外
於此書。此所望諸後進者也。

天保庚子夏五月

七十一翁竚齋石坂文和宗哲甫序
於定理醫學書屋

徒隊士 田邊平三郎 修書

內景備覽序

昔庾子山受溫鵬舉之候山祠堂碑文
 曰北朝唯寒山一斤石堪共語其它驢
 鳴犬吠也耳方今承文運亨通之餘諸
 家著錄之富何啻車載谷量乃梨棗竹
 帛之甘於受鑿契刷漆果有幾何今茲
 庾子之夏筴齋石坂君移病扁居
 其有洞又理篋行出舊著內景備覽更

加訂正。釐為二冊。命之剗剗。囑愷叙之。
通篇大意。張皇軒岐之真詮。於夷醜曲
說。排擄搏擊。皆中肯綮。所謂入室執戈。
誰得遁匿哉。天下有明眼靈識。則毋俟
乎愚之贊揚焉。與夫諸家珍之駘圖狗
狺之喧聒可厭。而隨成隨毀。固當殊絕
矣。儻者以為寒山之遺石。亦何不可。且
其精神鬼魄一則。昔曾與錦城翁論駁。

往復。當時翁亦遜于君之精覈云。嗟翁
之在日。愷何敢言。譬言之布鼓之於雷門。
方聞此言。亦瞠若自失矣。今 竿齋君
碩果乎杏林。而巍然魯靈光也。况前修
錦城已為舊友。則愷輩應趨其目指氣
使。是可笑。何拒鄙言之見激乎。是不肖
之所以屢序于其著書也。
天保十一年星夕前一日

唐公愷拜識



小西思順書



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '唐公愷' and '小西思順'.

內景備覽序

事之難學上者。惟醫下為窮。而世生之有妙
悟精通其術者。其人未嘗自以為苦學
砥礪而知之。而如得諸禁方神悟。偶然
者和漢古今史乘。其人不少也。蓋病
機之變。千態萬狀。若一立其方以

第一張

櫟園序

待病在聖人。有勢之不能爾者矣。夫
聖人之教。引而不發。沒以詩其人。經曰。
知其要者。一以而終。曰然。則醫之道。不
在學問。講求。而但在禁方神悟。而止
手。曰否。夫術。或者得諸偶然者。而若
其法與道。則是學問之極功矣。能深

通經義之人。必不能窮源極流。而到其
域也。明通人身性命之原。內藏外府。腦
髓命門。骨肉筋膜。洞然如見。然後察
其受病之由。臨機應變。治無一誤。其
法。謂沙嘗者。所能知耶。吾大嶽學高
先生。今茲養病之暇。裒嘗一所以弟

子之語題曰內景備覽書隆係語
國字皆得之苦學實驗之餘故其
為語不蔓不枝怡中竅會者夫怡
精神宗氣之原心藏非一身之主
宰并榮衛逆順諸器器之職學歷
之可睹至若其辨上中下三焦之能

第三張

自仲景後殆二千年和漢夷密之
共所未言及而悉徹諸內經聖語由
知上古醫者必皆證法實驗毫毛臆
測之語所謂其不解剖而視之語愈
可以徵也於我古經之不謬久矣夫本
朽而地生於是乎嗚蘭之學遠以內

櫟園序

景肆其說意者彼只出新術奇以
驚愚人之視聽尔夫我已曰宗脈而
彼譯曰神經我已曰榮衛而彼譯曰
動靜二脈其實我既盡之而彼第異
其名似寔加洋審要是支分節解
不過首藤之誤至其脾与腺公

創製烏有文字以瞞不學之徒好翻古
聖成案乃扇一世之俗噫是淫之過与
無乃世不講古經之繇典先生夙抱不
世出之資深有慨于此凡於黃岐仲
景之書咸能辨析秋毫視深答蘭
極口罵世際隆苛論不少依而其言

悉費於力學智辨之餘則他喙之
尺之猶巧遊之玄巽而不敢當其鋒矣
望錄踰七袞猶能勉強自謂採本
溯源之學吾已得其宗焉蓋非虛
稱也夫既擅天生之資而復誅之以
力之學子宜乎其於法與術不復詭

第五張

古醫聖經之道嗚呼世欲讀古醫經
者宜以此書一部以充指南車則庶乎
其不失所趨向矣書成而有命乃錄
前言以為序昔天保庚子之秋

東都逸醫 標園石阪宗桂撰

標園序

夢洲北圃有親書

邨嘉平刻

目錄

宗氣 宗脉 附治瘡法 治痲法 治偏枯論

肺

心

榮衛 中經

上焦 中焦 下焦

咽喉 胸膜 膈膜

胃

小大腸

脾 焦
 肝 膽
 腎 膀胱
 莖垂 命門 丹田 胞 子宮
 腹筋 水道 膏脂 肉 筋 膜 皮
 骨 詳骨經已梓行

内景備覽卷上

宗氣篇第一

西域侍醫法眼 石坂文和宗指撰

腦筋精神と云ふ是と宗氣と云ふ。頭の顛骨の内は充
 實して形を骨の如く堅く爲す。左右各三房合
 して六房に充實す。形を骨と云ふ。小腸の裏に
 多ふ如く。皮爲す如く裏は白く。骨は軟く。筋は
 是と裏は。是と腦と云。猶ハ頭筋筋なりと説文
 又云たり。猶ハ筋を結ぶ心筋あり。筋極く厚し。

之文紅白ありて。榮衛の細絡支絡縱横又纏絡あり。髓を脊髓あり。強同猶戸此分の骨乃中より一郭をなす。猶と職成同くして。外膜ありて包む。支道あり上腦より通し。下は垂く尾髓より出る。椎毎に左右より宗脈を出し。蓋腦髓共有榮の血と支網て。血は精純と醸れて。白き水液とす。其餘りを街り輸り歸し。榮衛受授乃際す。焦ありて其機をばさるるなり。各逆とす。其濁と鼻と泄と。

焦者上中下也。焦者胃の上焦也。小腸の中焦

あり。中焦此腎みありとのと。裏乃中焦といひ。勝理みありと。表此中焦といひ。腦ありしを於他の諸器りあはを。焦といひ。下是より下。腦髓生るる所乃純白の水液と。宗氣といひ。宗は為也。人身中是より為るる物なりと云也。平人絶穀篇曰。神者水穀之精氣也云々。春秋元命包曰。腦之為言在也。人精在腦也。皆上古聖人乃造之也。内經曰。腦為髓之海。膾中為宗氣海。宗氣ハ腦髓より出て胸中を積。其他一乃又周流す。素靈乃内。元氣真氣神氣精氣陽

宗氣とあるは皆宗氣の別稱なり。宗脈は宗氣
乃通路なり。この宗脈は二川の能あり。寒温冷熱
を受え。疼痛慘怛。喜怒羞惡。悲恐歡娛。寤寐驚悟
夢現等。目は視。鼻の鼻口は味。志思智慮の出入。腎不
肖は勿ら。是非好悪の出入。是は證。然る
已は具へて已目也と云す。神と云。是二川也。腦髓
肺心肝脾腎膽。胃大腸膀胱。上焦中焦下焦。男子は
莖垂。女子は胞子宮。皮肉筋骨毛髮。各其功績ありて。已
り具へて已れり。生成死を成死を成るものを精と云。是

二川也。は精神の二川也。宗氣の二川也。宗氣の二川なり。精は魂と云。神は魄と云。魂は陽
を主。魄は陰を主。魂は神の二川なり。魄は神の二川なり。魂は神の二川なり。魄は神の二川なり。
その二川は魂と魄と。魂は神の二川なり。魄は神の二川なり。魂は神の二川なり。魄は神の二川なり。
故に此書心臓乃心。皆心なり。心は神の二川なり。心は神の二川なり。心は神の二川なり。心は神の二川なり。
經曰。人始生。先精。精と成。夫人乃生。一精
母の胞中。胎と成。胎は唯是精也。一精
より。猶髓骨脈。皮膚毛髮を成し。出。児既

具り。分悦し出ま。唯乳と飲るを知るはみて
いふゆる神の至るなり。又曰。精熱して神生は
二二葉より及んで精漸く熱して神の伸より生
又六葉より十に五葉より神の精神乃和合して
平らうなり。一氣は人といふもなり也。母の
て食ふは培るの時節は同し。是よりして人の父母
ともなりん事あり。天癸は子宮より入。

上古天真論云。女子二七而天癸至。男子
二八而天癸至。天癸者何と云。天干癸は子宮にて成

と云ふは氣にしろもの。地といふは偏する時。地
と云ふは氣にしろもの。地といふは偏する時。地
精神和合の所。心と云ふは君と生る也。君は
五臓の心にあはしめて。儒書に心は身の内
なり。聖人の心は字と用いらるる。皆よくは
なり。

靈樞本神篇云。天之在我者德也。地之在我者氣也。
德流氣薄搏全而生者也。故生之來謂之精。兩精相
搏搏謂之神。隨神往來者謂之魂。並精出入者謂之魄。

所以任物者。謂之心。心有所憶。謂之意。意之所存。謂之志。因志而存變。謂之思。因思而遠慕。謂之慮。因慮而處物。謂之智。故智者之養生也。必順四時。而適寒暑。和喜怒。而安居處。節陰陽。而調剛柔。如是則僻邪不至。長生久視云云。本文文從字從。不須注解。

孟子冬心勇志意と混して後て。病志ありと如く。淮南子より出り。人乃知識を胆邪より出るとのときめり。是は古本下りし礼とて。後世の醫流も皆

之徳とす。人の知識は心懸より出るとのときめり。又よきしそよびお生相克の後也。因性乃中旨代混まなり。

拙。又乃お生相克乃後也。五色篇天年篇あり。ありと。因性乃又腕六腑乃部位のより付。亦ここは胆乃部位は胆より出り。本經の文なり。又よき多を胆より出り。膽乃部位はあり。故。各其大と克を。胆より出り。其胆乃胆。胆乃部位の。そのは胆より出。獨後因性胆乃

文と語り言はて。神は白く肝は青とさすといひ
如くもる。心は赤とさすといひあり。九歴代乃醫。
之を本按と語り。難經と祖と。内經神とあり
其の神を考へて。傷寒と臨入とあり。是予の平生
嘆息とさすゆえなり。

蓋字守の二行あり。精神魂魄陰陽の六行となり。
又一として物を任するゆゑ人の心は空となり。人の
人たるは令く具る。神と。病よりを精を餘神不足
なるは。獨戸牖を用く。明をきくは暗と好く。人お

乃交りて。心は病とあり。若し神有餘精不足はれ
ん。高きと登つて心は。夜と棄てて。云はれ。神
を省くと。竟んぬ人と成。若し心は。失心乱心乃
必は字能くあり。令く精神和合の機と。失心は
心くハ乱あり。若くは。生質。字守は。為人分
又喜怒憂思と。骨をハ。字守の。初度と。一なるは
に。和とあり。又字守の。自然と。之と。心は。精の
ハ。令く。神の。使用と。あり。その。衰弱と。あり。ハ。
則は。老。老。なり。通。通。の。病。と。い。と。稱。と。あり。

あり。今くハ健忘は病なり。古者養生の道と後り。
喜りハ精神と苦さぬこと第一なり。此毒乃
字際毒は字なり。凡そ和は思慮。分外の勞。
皆是毒と云へり。

宗氣の軟弱脊髓より生ず。一身内和は周く流る
乃路あり。是と宗脈と云。恙く皆膜と云くは毒と
裏心。そま白く透徹して。宗氣乃進退屈伸の性
成。自然又含きて。一身内和と稱り。其後と終ると
水道は混れわく。魚と云く皮和は化しある。

汗多き道ハ陽と
云とハ此義なり 其腦より出るもの十脈あり。左右各五
二十脈

第一ハ左右ともに鼻より出く。支別を生ず。鼻中より
周く。天宮と出入。五鼻と云ふ事と司は。

釋名曰。鼻引氣自昇也。按。鼻引天氣入于肺。又内
引口中飲食中氣味之氣。為胃門戶。食氣入于口。
其氣走于鼻。若臭惡乃不令下咽。是鼻之任也。

第二ハ左右より出るもの合して一とあり。又別して
Yと云く。兩目より入く腫となら。是目系也。其質
軟くは。 其支又ある。
目中之法膜は周く循りてよく視る事と司は。

人一目をまは。終身志多事あるは。腫く灌く
 所の宗氣。腦に通する事。深く深きなるあり。
 第三支。同く目に灌き。又支別を生じて。目中種
 のよきよきとすするやと司ふ。
 第四支。又同く目に灌き。周くその目中とすするやと
 司りく。まこ支を生じて。目の筋節とすする
 第五支。頭面の筋節皮肉。膝理。周く約するや。頭
 面の動止。まはとくなく。其末より。細支毛
 髪乃ちとす。

第六支。又目より循りく。眼眶の上下。及目珠の筋り。
 周くして。其目中とす。又支を生じて。第七支。宗
 脈と交り。筋節筋。動止と司ふ。表より。浮て毛のよき。又
 支別と生じて。第八支。同く胸膈へ循り下る。この支
 末より。膈部より。又多く支別と生ず。脊に
 十二雙筋。宗脈筋。左右一支と生ず。そのと舎。海と
 腰乃ち。雙筋支。骨。髌骨。骨筋。六雙の支も。同
 しく會合して。腹筋。あまこ。
 第七支。左右に耳に循り。耳の筋腫。周くして。聾とす。

とくく聴事を用は。目と瞳といふ耳外眸といふ内瞳の古言也。
第ハハ。左右六七の支別を生じ。又同じく合し一あり
一とあり。とくく頭項より胸部へなり。心脾及以從
横は隔膜より循り。膈中に聚ふ。經云。膈中者宗氣海也。
肺後胃後より循り。常衝の大道より周くまるといふ。又
支別を生じ。後部は後部より循り。後をまるといふ。乃
後を勤めしめて。下天後股より至ふ。

は宗氣膈中より聚ふ處。滯りてく物ありと胸へ
應るるといふあり。胸よりあると宗氣膈中へ聚る

宗氣へあつて居る也。

第九ハ。舌又循りて。言語を利し。天の五氣地の五氣と
調へ。又下りて胃中より周る。第又第六第八と同じく。
五氣伐むしめて。上焦乃後を合し一とむ。

按るるに。胃中上焦の職は五氣とむしりて。蒸
露錐状とくくして。五氣速くふ物より。灌漑を
る事。五務高のとくくみして。猶膈及人身肉脈と
卷る。舌より地氣に通し。味と香別を。五臟
小腸と同じ。鼻より天をぬき。又氣と合ふ

と。其職胃と相行し。

第十と項の宗脈とす。初より数道を生じ。頭項頤
結喉等は。皮膚。内裡。筋膜。よあましく。循りて。あかく
其用と為し。しり。事を見ふ。

とく。左右二十道の宗脈。猶より出る事。右の宗脈
又左に第五第六は支絡。猶中みして合して一宗脈
とあり。左右とく。頤の支例と循り。第八第九の支
別と合して。又数脈と生じ。頤の内。外。乳。肉。は。固。移。く
して。その。狗。より。足。缺。骨。下。は。互。り。肋。骨。は。循。り

て。又。腹。は。右。側。より。入。り。京。門。の。外。を。通。り。く。又。合。して
一脈とあり。腎。腕。を。循。ひ。脊。と。接。して。尾。骶。と。互。り。上。り
く。後。内。は。流。等。は。周。く。又。支。別。と。生。じ。第。八。の。支。と。交
り。胃。中。又。上。り。脊。髓。の。柱。毎。り。出。る。宗。脈。と。連。り。各
して。皆。右。の。用。と。為。す。是。猶。髓。相。合。して。用。成
ち。本。同。物。と。す。是。其。神。と。蓄。ふ。る。事。と。精。を
蓄。ふ。る。事。と。多。く。同。し。が。一。の。差。ある。は。此。也。

項より尾骶まで。二十。斐。乃。宗。脈。あり。椎。毎。一。生。じ。
是。と。髓。の。宗。脈。と。云。骨。空。より。左。右。各。支。と。生。じ。く。

前支は左く後支は細し。前を幹と。後を枝とす。
 項椎より起るもの七脈。左右合して十四脈
 脊椎より起るもの十二脈。左右合して二十四脈。腰椎より起るもの五脈。左右合して十脈。肩骨より起るもの六脈。左右合して十二脈。宗脈なり。乃三十双。

髌骨の骨空。左右各一。凡八竅穴有り。其室中より宗脈と出さず。各四條合して八條。髌骨と尾骶と接す。其間より起るもの二條。又合して六宗脈有り。左右十二脈。

項椎七。第一椎俗曰奉字内。言載頭顱也。第五第六第七。曰項節三節。通曰柱骨。曰復骨。曰空骨。脊椎十二節。第一椎曰大椎。一作焦。通曰吕骨。曰脊胎。曰脊骨。曰脊骨。兩傍曰膂。曰膂肉。曰膂筋。通曰背。

項の第一第二第三第四は宗脈。各支あり。生し。以て面肩胛等は。皮内筋。膜理を周く循る。第二第三第四の宗脈各一支なり。とと一雙とあり。胸膈へ下りて。経絡の傍より周く絡入。是を隔膜の宗脈と云。又第三第四第五第六第七は支絡。脊乃第一は宗脈

二合しき。左右のより下降す。皮膚焦理と循す。筋
絡と約束を。是とより筋の宗脈と云。又より支のより筋
骨。肩髀項項より周く及ぶを。

脊椎より支ふ十一支乃宗脈。第一椎より起るをのた
くして。項椎は宗脈と合してよりより定。肘臂掌腕
乃屈伸。及五指の浮握とくく自由をくく。其筋乃
十一支。各脊脊と循す。胸肋より後筋の皮肉筋
腔膜のより支ふ。又第一より第十二支の宗脈。各
一支と生し。肋間の皮肉筋筋より周流して。腦の筋八

乃宗脈を合して。其循行は随ひ後筋へ下り循す。其
後支の又升りて。項頭、肩、肘、髀、背脊乃。皮膚
膜理より周く及ぶを。

腰椎五支の宗脈。第一は支列と生し。獨行よりして。第
五は宗脈は支と合して。膀胱へ行きて腸と循り。陰
筋より周流し。水腫と針刺する。第二は陰器と腰より
第一支は筋又は。そのより八筋より循り。髀骨は宗脈と
交り。是筋より皮肉筋膜より周流く。其後支を
腰髀は皮膚より周く及ぶ。又第一より第五支

各一支と生し。脊の十二楚各一支をまきまきと相合し。その又又腦乃ち此支の始は此支の合し。腰腹より生し。又第五乃ち支は此支と合して。膀胱と陰氣を納む。八髻及骸骨より出らる。第一第二第三第四は腰乃ち宗脈と交り。之は自由と云ふ。此支は皮膚より出らる。此支は自由と云ふ。是は宗脈と云ふ。又第六は直腸に納り。膀胱及男子の茎と女子の

子宮胞と周く。命門丹田に納り。各其用をなす。又第一の支は始は此支の合し。腰腹より生し。膀胱と陰氣を納む。八髻及骸骨より出らる。第一第二第三第四は腰乃ち宗脈と交り。之は自由と云ふ。此支は皮膚より出らる。此支は自由と云ふ。是は宗脈と云ふ。又第六は直腸に納り。膀胱及男子の茎と女子の

内景補記

七

ありしはたれ又度と去りて。諸病病除めりてくはる。
 抑さハ感冒風邪。守さハ傷寒熱病。邪者少く
 宗氣と破さる。不仁偏枯癱瘓をなす。在るはさハ
 卒厥。卒中風或ハ卒死をなす。是一行あり。

按とるよ。天地間の邪毒。人身に入るとは時ハ
 宗氣是々為る。急激して勢いと増。その邪毒
 を除きさるんとす。故に榮衛の流動も感り
 するのく。その人又害あるんを。邪毒と除きさ
 るとす。其勢ハ止ると。たに於て宗氣盛れ

しく流さるもの。邪是と侵さる。あはるる。故
 竟りハ邪氣厚けく退さる。故に宗氣もさる
 定りその初も復さる。邪氣又く抑りつり
 しく。そのいさゆい流さる。宗氣もさる。敗
 散して終り死り。或るはある。是はくや。或るは
 二行あり。さるる。或るは。は時ありて。時とわ
 らぬ。深く思ふ。あるは。凡は。この場合
 あり。上エ下エも自ら判じ。解らるる。事なり
 あり。

又按之。時疫の行々々や。疹疔の氣地土に
流行する。地中にも同くその氣行る。是
其惡氣自然に水脈中に入りて衆人一様に
その災と被る。是れあり。是れ惡氣飲食よ
り入先胃腸より入り膜原より入りて邪なり。
吳氏の鼻より入り膜原より入りて邪なり。諸
書にやうに記す也。

飲食の飢飽度と夫しく。病胃腸より起り。或は食
物より邪毒入りて。胃腸は宗氣是れなり。破る也。

津液自然に消耗して。膈噎嘔吐及胃。久泄腹痛
多種々此疾病陸續と發起す。そのことさし竟に
脈のへらけりたる。是れ二例なり。

按之。飲食度と夫しく。或は食飲の肉と食ひ
る。或は其天蓋人膽を損するの類なり。是
胃中又其小腸中に惡汁と生る。その惡汁と
拂ひ除らんたる。宗氣自然に力減用ひ盡すと
倍して。其邪を續り聚る。平なるも是れ也。
自己の力に輸く。播擲瘰癧と發し。角弓

反張と云ふ。是れは胃をなす。之れは
 けりく悪汁を除く。是は。宗氣竟り自持し
 ぬ。死に即ちそのある也。是れ。前初一度は汗
 を出さず。或は胃弱と云ふ。是れ。大汗流
 弊し。病は平治と云ふ。是れ。宗氣と云ふ
 一くは。宗氣の力と違ひ。精の感ある
 時よりして。病を除却し。藥劑計を以て
 くるの準的と云ふ。是れ。移りて臓と云ふ。是れ
 なり。

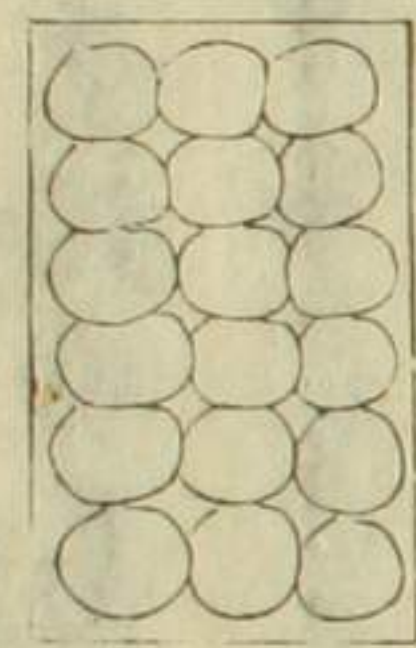
又按り。宗氣は邪と云ふ。是れ。人飲
 食の間。一滴乃至飲後りて。氣管に入ると。必
 是を疾し出さず。是れ。収まるる。僅か
 一釐の水滴も。喉管中より止まる。斯の
 ち。くんや。呼吸は。飲食の毒り
 於る也。ちひは。呼吸は。敵國に患あり。國境
 治むるも。病を免除するも。其の理は。則ち一轍也。
 今。此語を。宗氣宗脈の何れと云ふ。と
 云ふ。是れ。顔面。人の命を。あはせし事。

其還何を以て修しんき

色慾よりして。房事と云ふ。宗氣是れ慾と極めし
ひるは力竭しき。竟に虧損して病内より生し。
或は極より少しきに病を有す。是ニツ也。其他ハ
金匱の症。諸熱の變とる所。皆宗氣と破しきハ
なり。是金匱ニ痛症とる所有り。人ハ皮膚筋骨内
臟外腑。榮衛之焦ありと云ふ也。先ニ破傷と云ふ
そのハ内外とも。宗氣の外なり。其ハ宗氣の一
と循る事。縣として後と。互ニ支絡別絡と生し。

或は連り或は合して。表裡の諸筋。筋脈。周流
し。行而わのく。皆よりある所ありて。各腎の虧損あり
り。よき事也。其髓より出る所のハ。皆とるなり。
頸項。手足。項項。肩髀。背脊。腰腎。胸腹。循りて。
皮部より。周りに浮むハ。

宗脈一身乃
皮部より
あまねく圖



此圖ハローレル解剖書の要なり

此の皮部より。めみ出する宗脈の形。想ふハ
網乃襦袢を思ふるごとく。少くは透るもく

馬はさし。是よりく痛瘡寒熱を効。一乃は
保護液をとり。治切なり。近世發泡と唱へ
芥葉鈎吻葛上亭長等と。膏藥り溶し。
人身をとり。とりて泡をなす水をこふ。亦乃
宗極の圖と名く。此を名用ゆる事なり。
此より胸背を名じし。

唯その内部と循らるものハ。陽膀胱陰腎とあり。
陰腎より周く。畢丸畢丸一名命門丹田宗極水と生じ。
腦より出るものハ。當り眼耳鼻口舌と循り。頭乃周

布と周く。又別をく。左心と右肺と。心肺一
流し。咽喉より循り。骨節より結し。胸背に周く。胃中と
循り。腫中のみを舎覆し。下を後部に入。諸恙ありあま
りく。脊腰骨節より出るものハ。骨支と合して。其
循らるを同く。亦生じ。化し乃基と名じ。髓の任
みして。當り生活乃名とす。百年乃壽命と名じ。
とまるとものハ。腦の職と名じ。是腦と髓と同一く
人乃主宰なり。枯死。魂魄陰陽和合して。宗氣
と名じ。心と名じ。其道流と宗脈とす。又猶も玄庭

泥丸とソハ。髓は元命門と云。名も月と上下此
 異ありあり。是則天地陰陽の徳化と爲て。万物の
 靈たるゆゑ也。唯々宗脈乃通せり。凡發鬚
 髻と。そりくの骨と剛筋と外皮とあり。經曰。人之
 始生先成精。々成而腦髓生。又曰。精熟而神生。骨為幹
 脈為榮。筋為剛。肉為牆。皮膚堅而毛髮長。穀入於胃。脈
 道以通。血氣乃行。云々。血者榮衛也。氣者宗氣也。醫宗
 金鑑曰。神之名義。○形之精粹處。名曰心。中含良性本
 天真。天真一氣精神祖也。體是精。功用是神。注曰。形

之至精至粹之處。即名曰心。動物之心者。形若垂蓮。中
 含天之所賦。虛靈不昧之靈性也。形若無此心。則無主
 宰。而良性生意亦無著落矣。此心若無良性生意。則心
 無所施用。不過是一團死肉耳。○神之變化曰。神從精
 氣妙合。有隨神往來。魂陽靈。並精出入。陰靈魄。意是心
 機動。未形。意之所專。謂之志。志之動變。乃思。名以思。謀
 遠。是為慮。用慮處物。智因生。注曰。魂陽之靈。隨神往來。魄陰
 之靈。並精出入。蓋神機不離乎精氣。亦不離乎精氣。論
 特操。如故曰。妙合而有也。婦返魂香。來故指神而言。神
 此也。

約景備覽

七

起乎精氣之外。指精氣而言。則神寓乎精神之中。下畧
 以書之。清國乾隆乃始。親至和碩和。及醫書館の格
 鄂爾泰。太醫院錢斗保。吳謙。劉裕鐸。等數十人。
 多諭して撰む。四庫全書提要曰。體仁育之心。根據
 古義。而能得其變通。參酌時宜。而必求其徵驗。云々。
 而精神の理。を陋ゆ。徹底乃然といひ。心乃
 名義を説く曰。形の精粹を心と名づく。中
 一良性を少くも天を以て主と祖とを。凡人物と
 して動物皆心あり。形運を極垂と云ふ。

中は天は與つるを乃。虚靈不昧乃靈性と名
 む。人として心なきん。人はありある。形なきか
 く。心も亦は性なき。一毫の死肉こと。精神魂
 魄陰陽の義。靈樞の中神篇あり。金鑑取素問
 難經而不取
 樞。主理とよめて。朱熹乃虚靈不昧と眼御と
 して後これ。人として乃心に存る。左支右容は
 後として。蓋人の知識を心就より出ると。秦
 漢の世より言ひ。根源既を後。其後歷代は賢
 人達士その後を傳へ一人の善明なき。後人

たり。そとて日。唐國は腦髓精神と解るる理解し
 多し人出衆し。極は膠して疑と疑せし。二子子の
 儒醫とては。何れ西國ありきや。予はよく語れ
 玉露と流し。唐の李白。水王隣にその教道と從
 忠と。と。朱晦菴は曰。唐人は頭腦なきか。このこと
 一と。也。一と。と。何り。左と。道。の。精。神。を
 ちと。む。さ。は。い。さ。や。と。と。又。法。は。董。會。の
 考。以。贊。業。也。欽。天。監。南。懷。仁。と。り。ふ。と。の。と。考。を。下
 の。一。書。と。抄。し。り。と。言。ふ。と。く。と。靈。龜。と。性。と。す。

一切の物微記憶。心よありき。とて頭腦ありと。諸
 説も不短。多極めて判證。命し。と。立。據。よ。是。と。堪。と
 ある。古は移く。れ。朱子。学。行。を。進。く。り。必。解。り
 人。能。知。識。の。出。る。と。の。と。落。矣。と。る。よ。南。懷。仁。の。説
 是。外。の。時。を。朱子。の。学。法。證。す。り。也。朱子。は。學。み。を
 あ。わ。さ。り。を。ん。め。は。天下。乃。修。入。を。法。證。す。り。天下
 傳。つ。而。法。證。す。り。を。進。は。儒。法。定。理。と。考。入。是。法。を
 事。と。ゆ。と。始皇。の。書。を。種。し。陰。陽。匠。卜。の。書。を。考。り。
 懷。仁。の。書。證。を。考。り。ん。り。は。法。を。又。考。し。按。を。考。り

懐仁昇化の夷人。心の字と。腦筋よりいふこと。尚何乃解割家よりいふ。精神和合乃中。心字を以て。心字を以て押せ。上竟舞より下今よりいふ。文字の君好あり。精神ハ心よりいふ。腦筋よりいふ。上下數ある人。皆此の如し。東海聖人と云ふ。西海聖人をいふ。聖人復起必從吾言矣。非漫為大言以惑世也。

附録

治瘧法 瘧論 歲露篇

黃帝曰。夏日傷於暑。秋病瘧。々之發以時。其故何也。岐伯曰。邪客於風府。宗脉一日一夜大會風府。故作晏也。瘧之始發也。先起於毫毛。伸欠乃作。寒慄鼓頷。腰脊俱痛。寒去則內外皆熱。頭痛如破。渴欲冷飲。帝曰。何氣使然。岐伯曰。陰邪陽正。上下交爭。

邪氣入客於人身。宗脉榮衛努力。而除泄諸外。其交爭之勢未決。勝負則閉塞為寒。慄鼓頷。邪負正。

勝宗脉榮衛之閉塞者驟通則內外皆熱而渴

虛實更作正實邪虛陰陽相移也陽者正也陽若於陰

則陰邪實而陽正虛則寒慄鼓鎖中外皆寒陽盛邪之

通宗脉榮外內皆熱而渴欲冷飲也此皆得之夏傷于

暑熱藏於皮膚之內腸胃之外宗氣之所舍故邪之

中人有寒暑寒則皮膚急而腠理閉暑則皮膚緩腠

理開賊風邪氣因得以入其中不得以時然必因其開

也其入深其病久也卒暴為傷寒為熱病為溫病為暑

其入淺以留其病久也徐以遲瘧氣留其處淺與宗

榮衛氣若居因得秋涼氣進隨榮衛沈以內搏故宗氣

應乃作也是以日作其明日亦大會風府也邪中頭項

者宗脉積頭項而病作中手足者積手足而病作中於

背者積於背而病作中腰脊者積腰脊而病作邪之所

在與宗脉相合而病作故風無常府邪氣所在則其府

也名曰風府非穴名其間日發作者邪氣之舍益深內搏

於藏橫連募原小腸之募原其邪氣深其宗脉應遲不能日

發作次日乃稽積而作故間日乃作也

按瘧邪留其處淺則宗榮衛相遇而稽積交爭者

其運速也。故日發也。瘡即日以下以遂其舍益深而內薄則邪日積而宗榮衛日衰。故積積交爭之勢微矣。為問日發。

其寒湯火不能溫也。及其熱冰水不能寒也。當其時良工不能止。必須其自衰乃刺之。無刺熯々之熱無刺渾渾之脈。無刺澆々之汗。病極則陰邪陽正俱衰。宗氣與邪相離。故病得休。宗脈集乃榮衛亦集則復發也。夫瘡之未發也。陰邪陽正未甚。因而調之。真氣得安。邪氣乃亡。

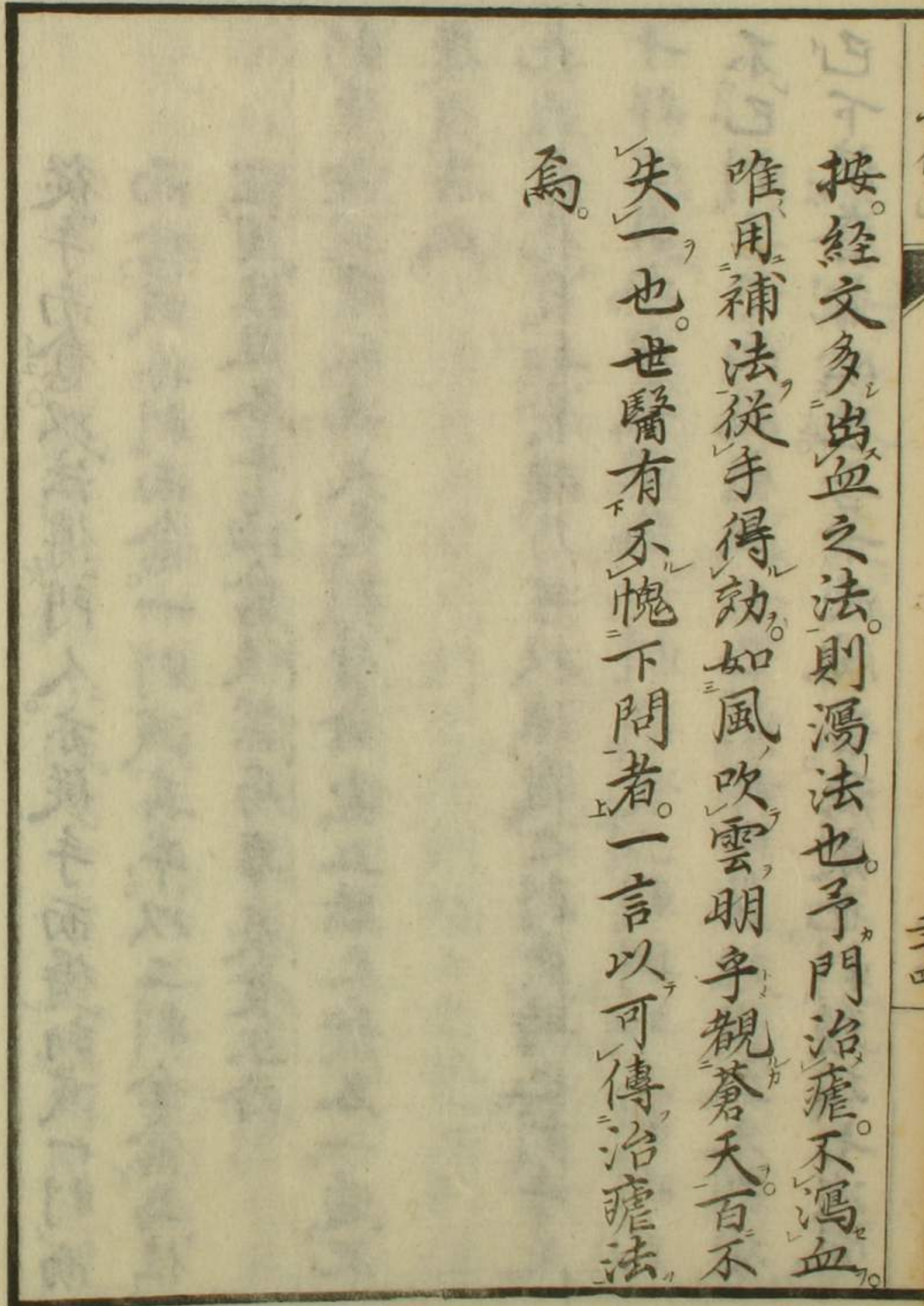
按此一章截瘡要語。予據此一語發明刺瘡之理。

從手而愈。以法傳門人。亦從手而得。効或一刺而而愈。或再刺而愈。一刺減其半。以二刺全愈為佳。宜用桂麻各半湯。愈後禁房事及食生冷。

刺瘡論曰。瘡脈滿大急。刺背俞旁五腧之俞各一。適肥瘦出其血。

凡治瘡先發如食頃。乃可以治。過之則失時也。刺手足十邪穴出血。血去必已。一刺則衰。二刺則知。三刺則已。不已刺舌下兩脈出血。不已刺都中盛經出血。又刺項已下使脊者必已。舌下兩脈者。廉泉也。刺頸項七次穴。

按經文多出血之法。則瀉法也。予門治瘧。不瀉血。唯用補法。從手得效。如風吹雲。明乎觀蒼天。百不失一也。世醫有不愧下問者。一言以可傳治瘧法為焉。



諸篇篇第二

肺 儀禮士昏禮注曰。肺者氣之主也。

秘典論曰。肺は相傳乃官治節也焉と。
 肺は天を象し。心を象し。心は相傳乃官治節也焉と。
 肺は天を象し。心を象し。心は相傳乃官治節也焉と。
 肺は天を象し。心を象し。心は相傳乃官治節也焉と。
 肺は天を象し。心を象し。心は相傳乃官治節也焉と。
 肺は天を象し。心を象し。心は相傳乃官治節也焉と。
 肺は天を象し。心を象し。心は相傳乃官治節也焉と。
 肺は天を象し。心を象し。心は相傳乃官治節也焉と。
 肺は天を象し。心を象し。心は相傳乃官治節也焉と。
 肺は天を象し。心を象し。心は相傳乃官治節也焉と。

あり。胃中に入らざるものを吞心。咽は機を助け。
 始ハ一復りして支股となりて支。肺ハ入。枝と生
 じ。くく死たくく。中積有り。細少は枝となり。
 之ち小の支は舊養從少くはくりたる。養附あり。
 微小なる泡のさく。凡人喉より舌を吸納系
 時に。之を養養く。ゆつる。又宗脈及榮衛の血
 道也。同く肺中へ固く循りて。喉管の裏に連なり
 絡へり。此養の中は天地間の大氣入充て。其氣
 榮衛は支絡の細少なる。而も通じ。榮の血は支と受

多而勢ハ自然リ。活潑して。脈脈へ降り。衝脈へ
 出く。一身へ輸り出。又衝より輸り入を。夫人
 一日一夜凡二萬三千四百息。難經一萬三千五百息。と云ふ。あやまりき。脈動十一
 萬五千八百動。人一呼吸は脈再動。一呼吸又再動。呼吸定
 息脈五動して。榮の出く。衝は入る。一日一夜凡三百餘
 周。牙。寸。肘。尺。屋和奇多は寸肘尺。各一息の時節と云ふ。十二三周。牙。寸。肘。尺。のさくく
 しく。呼吸者も休むことなり。休む時を乃死を。此
 呼吸の養養有り。膈膜あり。上下は凸凹し
 て。想身へ微動と云す。榮衛の出入。食飲の消化。皆は

呼吸と本指とす。

心 本作心

内経曰。取者脉と云ふ。又曰。心之合脉也。脉ハ血と云ふ。亦此府也と云ふ。右肺乃同よりありて榮衛と出入して止時なり。左肺乃開と云ふ。蓮花と傷さまふ。たふこく。上は廣くしてせし。右より。下は狭くしてたふく。左乳の裏よりありて。此府乃質皆肉筋を伴り多し物に云。右肺は榮衛の内ありて。左右二室より血は左室狭而長、右室廣而短、右は方ハ衛と納て肺に輸る室也。右の方ハ肺

より入り来ふ。榮と交納く。脈を一身へ出さ室也。此府縮張ありて。動く止は。膨らむ時。右室ハ衛乃歸り来る血を納む。左室ハ肺より降り来る血を納む。縮まる時。左室榮此血を大動脈へ輸り出す。右室ハ衛の血と受けし。右の肺肺へ輸り上りたり。右乃右の四ノ乃系有りて。右大指と入る。右の心と云ふ。右乃第一冬。衛の血と受く。右室へ納る系あり。第二冬。受け納りて。衛は血と。肺に輸り上る系也。左は第一冬。肺より輸り下る血と受く。系也。第二冬。榮の

内景補鏡

三

大動脈乃管人輸り血を系之。合せく四系あり。

古の人云。心は五臓より系をとり。四系肺肝脾胃

通するといふ得たり。大なる脈なり。うやうの空路

ある故。世の解剖家は淺視せしむるもことなり。

心は始終。縮張動搖をとり。土壅は天祥のこぢり。

一止する時。心乃脈動もす。一止を伸と天祥と

り。心もあまると。伸の呼吸と又息をとり。脈動り

妨り。且呼吸を後心。心乃已り。自中より成り。

心乃動搖のよき。心乃已り。自中より成り。止すれど。心

身上下左右に動脈。一時止ると心く。天祥のこぢり

なり。夫脈乃大小。長短。滑瀦。緩急は。心乃有餘不

足病邪の剛柔。字氣は盛衰あり。心乃有餘不

彰。心乃有餘不彰。然るも心は頭面を足。腹背。

胸脇を處する。病邪あり。心乃有餘不彰。然るも心は

心乃有餘不彰。然るも心は頭面を足。腹背。胸脇を處する。

心乃有餘不彰。然るも心は頭面を足。腹背。胸脇を處する。

心乃有餘不彰。然るも心は頭面を足。腹背。胸脇を處する。

脈法有り。後世偽の書多く。多岐乃寸はと云く凡生
 者凶と授と云く。むのくも云なり。九候福有り。手部の
 脈を診して。胸中と候ふと候まは。上下の二部は棄て
 診察せさる。法法有り。余の著と云の診脈
 古義り詳なり。脈中の血は宗室
 天氣を名ふ。故中神篇に。肥之脈と云く。脈中神
 と云く。と云く。母の胎若は福と法法云は。胎智識
 と云く。と云く。入つて。脈の定むと云く。

榮衛

榮を脈中と云て。降る。言々の下降と云く。と云

乃くを脈と云て。動を止すと。降りて。又外に。
 外ふとのを衛と云。衛ハ脈外と行。頭面も是より。青
 筋ハ皆衛外なり。
 地を乃外と云。榮衛血道外降。お連りて。環の
 外を。と云。と云。と云。榮ハ脈動なり。
 脈外左系り。始也。衛脈は降る事。お外なり。と云
 と云。衛脈ハ大衛は外なり。脈の左方より。
 上ハ缺盆骨下より。下ハ脇中又心。一條の大動
 脈なり。腸膜と脊骨との間と上下を。と云。と云。と云。
 缺盆骨下の左より。と云。と云。左より。と云。

以より子みわら。大脈より径となり絡となり。支絡
孫絡細支絡となり。其末の毫毛の如く羅のあはく。

靈樞。其末
羅の如く有り。一身内外表裡の循之周くして。細微の支と

之とも動く居存を。予々著之。常衛中序
乃因り。洋也。うなす。

三部九候論曰。脈有三部。部有三候。以決死生。
以處百病。以調虛實。而除邪疾。上部之天。兩
額之動脈。上部之地。兩頰動脈。上部人耳前動
脈。中部天。手大脈也。中部地。手少陰也。中部人。手
少陰也。下部天。足厥陰也。下部地。足少陰也。下部

人。足太陰也。故下部天。以候肝。地。以候腎。人。以候
脾胃。中部天。以候肺。地。以候胃。中。人以候心。上部
天。以候頭角之氣。地。以候口齒之氣。人。以候耳目
之氣。九候相應也。上下如一。不得相失。為平人。不
病也。必先知常脈。然後知病脈。獨小者病。獨大
者病。獨疾者病。獨遲者病。獨熱者病。獨寒者病。獨
陷下者病。上下左右之脈。相應如參。者病甚。上
下左右相失。不可數者死。

夫衛は。榮は。末。細毛髮の末く。うら所の血をうけり。

生を。下集此管街受。送行して細支絡より支絡となり。
枝絡場をりす。 孫絡となり。絡となりと種となり。大経と成中絡の血と
 一大道より集りて。横膈膜と貫き。頭及びより。二系
 之のと管同して。尿管の右系り入。此榮衛受枝の
 右に下集ありて。榮衛管より水と滲して。水道と
 生し。血を毛髪にめき。微乃細絡へ輸り入る事をは
さしむ。主臓腑の下焦と同し。腎と裏れし焦と云。二地ハ
表の下焦と云。只集りて。微此
 血乃又五分或一寸程の石毎に辨ありて。周圍す。
 此周圍の様と。内經の節と云。節は文之音の千也。

と六分あり。此是輸官の右に鼓あり。軟なる膜
 有りて。作する物之。微此より血を。此節より右にた
 之く輸り。此物より小絡より。經より大經へ
 輸り。此乃右系り入る。是より物中より出る。右乃精磨の
 乃。微の此は右室より。右大道は混同し。白と云の管化
 てあり。一物より。此管と揃へて。此の右室へ。右より。是
 ち。其拍子より。細く。輸り上げ。右室と合。降して
 尿管の左室は。右より。微脈は。灌して。榮衛脈中より。右
 室は。微脈より。微は。右より。寸に。節は。右なる。右

乃右室へ入る術は拍子と逆く。脈と連屬して大小
體のうへへ入る。夫術の源を多く以て西東より起す。
本輸篇より并榮輸經合於右と云る。皆術の運行
と強知しやと云ふ。榮術を血と云ふ。脈ありて
此のものと榮を命。逆行して入るの強術と云ふ。
此のものと榮術の人身と通る。強の強を云ふ。
古人は所謂榮血なり。術の氣ありと云ふは強也。
榮血の人身と通る。強は強なりと云ふは強也。
強は強なり。強は強なりと云ふは強也。強は強也。

是より。腸より集り脊裡と外を。強血骨中より入り
術より混同。強は乃右室へ入血と云り。人より本
根と云ふ。予天の氣を血と云ふ。強は強なりと云ふ
は。強は強なりと云ふ。

中經 史記扁鵲傳曰。強緣於中經維絡。

夫中經者一筋の奇經也。其形又痺乃あり。強は
乃強也と云ふ。強は強なりと云ふ。強は強なりと云ふ。
大強なり。上は強は強なりと云ふ。強は強なりと云ふ。
強は強なりと云ふ。強は強なりと云ふ。強は強なりと云ふ。

節あり。当り行猪脾焦胃と大小腸を循り。横膈膜
 此之絡と有り。腹中の筋蓋と抱護する。腹中へ入る。
 絡の功あり。其絡は肝を入る。較多は細絡と生
 一。その血は衛りしとく。其周の受授は同一く。中
 焦といく。媒とあり。其肝は入る。肝膽の二汁と製ら
 る。助けしと有り。脾焦よりなり。又其二汁と製らる。の
 助ありと有り。又胃の腸大筋直腸は入る。周く向く
 其受能と助く。腸風下血の類。肛門より出る血を。皆此
 中焦の血なり

按をり。凡胎兒乃胎帶兩岐とあり。其二
 肝より入。又其一の中焦より連る。是則母の血と胎帶
 より轉り入る。肝より入る。胎帯より轉り入る。胎帯より轉り
 入る。中焦と循り。中焦より又胎帯より轉り入る。其
 そのと受えゆ。

上焦 胃中也

絡より。上焦の絡は心とく。又曰上焦関蔽して五臓の氣
 とけり。乃ち元氣と澤厚し。其務房の既くあり。是成
 三焦といふ。是道人飲食胃中より細り。胃中上焦の役也

以之飲食中水穀の五氣と蒸し之。惣身一務高の
 天地間を灌漑するごとく。澳史の言を述ぶる所なり。
 此氣化を成るとい。胃中自己乃液。宗氣と云くは心
 と。脾より輸を流あり。心より脳髓を流し之を養ひと
 なり。九土地有る生し之。人於食となんて之を。其味
 乃具く之を成り。強よ曰。天人又合一。此又氣
 と云く。此人下合一。此又氣化。此又氣
 之。上焦胃中を化し。味ハ中焦小腸中を消化を。
 此又又胃中の上焦を化し。之を成り。小腸乃

中焦心と受也。同く吐逆して之を成を。張仲景曰。
 上焦初せられ。喘して吞酸を。又曰。上焦得通。其氣
 得和と。吞酸喘逆ハ吐逆嘔吐の漸之。氣化のよく成
 一。子時ハ反胃と云。氣化絶ゆ。時を陽暄となす。
 上焦よく五氣化を成。有形の味いと小腸より成。
 小腸その味と受て。消化を成り。速く成。時は。胃中
 空虚となり。其の味を求むる。其の味乃
 中焦不知くと。味と消化を成り。其の味乃
 別不食と云。平人後穀曰。上焦泄氣。出其精微。脾胃

滑痰也。上焦五氣と化して霧露の如く一月へ
 灌く。そのを若くは枯微といふ。小腸の中焦。五事を消化して。其の
 中よりそのを精微といふ。
 その氣と化しての速なり。一杯は酒を頭より是上
 有り。一杯の食糧は腹と受ゆるの類なり。其もさ
 たり。強子曰。食を胃より入るは。精と脈と淫とを以
 義分る。此亦亦同靈樞中。氣味は淡滲夜しくは。汗
 多かり。氣味臭味は寒涼温熱平如。香朽糞腥
 焦。辛甘鹹苦酸。即五氣五味也。五味篇より。穀始
 入於胃。其精微者。先出於胃中。以之兩焦。以灌於筋。

別出兩行。榮衛之道。其氣之搏而不行者。積於胸
 中。出於肺。循喉嚨。故呼則出。吸則入。天地之精氣。其
 大數常出三入一。故穀不入。半日則氣衰。一日則氣少
 矣云々。三と出ると。八胃中上焦化して。其の穀氣といふ。
 一を入ると。天地間の氣と云なり。故に胃中上焦乃
 氣養ひ蓄へる。そのを。字守とねましく。其は
 大氣といふ也。

按り。上焦霧の如く。そのを。五味篇乃文と以
 て考へらる。胃中化して。其の精微なる也。其

中焦も焦なり。又肉より周りて。榮衛も透り。竅
しく。移時一月より長く積ると。霧露の滲
漉の如く。とりあがり。

中焦 小腸中也

經曰。中焦受味取汁。變化而赤。是謂血。凡飲食中乃
氣味の厚い。よく胃中にて消化。又八難へ敷と
終り。強り。その有形の味と。胃の中より小腸の上
り。輸り納ふ。小腸は條と合する。その細り。是を
い。のち。堅韌の物とも。漸清して柔軟く。一先。

消化して粘糜と造る。粘糜とは。又白くして乳汁
なり。と。この也。經曰。中焦如漚。古今醫家は漚字
ありと訓して。水上の泡と。多く。入る。後と。詩經
乃東門之池。以て麻を漚と。とあること。漚は。す
と。入る。その漚して柔軟く。と。その。脾肝
焦焦の義下
は。詳なり膽乃汁を。腸膜の呼吸して凸凹と。度は
小腸へ輸り。絶を。小腸は。肉より。自己の汁と。環
り。又液と。入る。腸は。同。約。腸と。覆ひ
包む。網の。こと。中焦消化の役と。初め。

内經云。下焦ハ瀆の末と云。即水瀆の末なり。釋名云。瀆ハ通なり。垢濁を通さるゆゑん。瀆ハ濁なり。其功大なること云々。時珍云。所謂非脂非肉。白膜裏之とは是なり。兩腎乃下焦之附屬也。血中乃水と流し。其濁と尿となり。膀胱ハ輸子。その滓液をろく血と。中經ハ輸子入也。其水脈の腎ハ輸子。其滓液をろくそのを流し。濁と云り水道と云。是と裏の下焦と云。是下焦中の最大なるもの也。其他腸膀胱上中五臟の滓液もあること云々。唯焦と云。又一身内外

充之して。而此也ありて。其水滓潤をなす。其功乃交陰也。居之受授の職と云。是と裏乃下焦と云。其功大なること云々。裏の下焦能化し。小便能利也。其功大なり。肌表は下焦能化し。汗と出。汗ハ下焦に在る血中の滓液と流し。其功大なること云々。其味鹹と云。是皆下焦の職なり。

按此ハ解剖家。下焦の職と云。其功大なること云々。其味鹹と云。是皆下焦の職なり。西洋も云。上中焦。消化消化乃理也。

いづれに國者なりと云ふ。理解ぬるにせしむ。神解は世をふたつ。唐代輪池翁の予る若しせし知要一言は語り。ひしし梵天子。深院論を傳へ。その商孫法羅門といひし。その道をうけつさるり。まは吠陀の第一と書吠陀といふ。養生経性法事を後と。南海寄帰傳を志す。西洋乃國といひ。窮理の醫術を志す。天竺より傳へりといふ。按てふ。靈樞經水篇曰。夫人生天地之間。天之高

地之廣也。非人力之所能度量。若夫八尺之士。皮肉在此。外可度量。切循而得之。其死解剖而視之。藏之堅脆大小。脉之長短。血之清濁。氣之多少。皆有定數云々。解剖既り。之皇は世に初り。之教は流まき。為方へ入し。そのなさん。於天学のこく。明乃系曆中。利瑪竇為方の学を傳へて。中國り入るとあることと。西學の傳入。まは九家ありと。法新梅文鼎の流まき。圓解の天學流まき。西方へ入。其學

能あり出る所なりと。亦解剖の事と同く
中国より西へ西洋の事なく。毎に中国より
入るる。西洋科斗文字。語と括り。冗長拙
劣。譯家譯語を造せし。或ハ新文字を創りし。
或ハ引證を失ふ。立説淺薄。不可解。
上中二焦乃理。既ニ論あり。亦その理解
を得ざる。方技之云。雖不可責。以文章之事。
亦非文章。即不能達其意也。

内景備覽卷上 終

内景備覽卷上 終

